

第2講

寺を建てる白河、流される法然、橋を架ける叡尊 —院政期から鎌倉時代初期の仏教の動向— (2012 年度第2問)

院政期から鎌倉時代にかけての仏教の動向にかかわる次の(1)～(5)の文章を読んで、下記の設問A・Bに答えなさい。

- (1) 院政期の天皇家は精力的に造寺・造仏を行った。白河天皇による法勝寺をはじめとして、大規模な寺院が次々と建立された。
- (2) 平氏の焼き討ちにより奈良の寺々は大きな打撃をこうむった。勸進上人重源は各地をまわって信仰を勧め、寄付や支援を募り、東大寺の再興を成し遂げた。
- (3) 鎌倉幕府の御家人熊谷直実は、法然が「罪の軽重は関係ない。念仏さえ唱えれば往生できるのだ」と説くのを聞き、「手足を切り、命をも捨てなければ救われれないと思っておりましてのに、念仏を唱えるだけで往生できるとはありがたい」と感激して帰依した。
- (4) 1205年、興福寺は法然の教えを禁じるように求める上奏文を朝廷に提出した。このような攻撃の影響で、1207年に法然は土佐国に流され、弟子の親鸞も越後国に流された。
- (5) 1262年、奈良西大寺の叡尊は、北条氏の招きによって鎌倉に下向し、多くの人々に授戒した。彼はまた、京都南郊の宇治橋の修造を発願し、1286年に完成させた。

設問

- A (1)と(2)では、寺院の造営の方法に、理念のうえで大きな相違がある。それはどのようなものか。2行(60字)以内で述べなさい。
- B 鎌倉時代におこった法然や親鸞の教えは、どのような特徴をもっていたか、また、それに対応して旧仏教側はどのような活動を展開したか。4行(120字)以内で述べなさい。

解いてみましょう（第2講）Aについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア (1)と(2)の、寺院の造営の (7) の違いについて書く。

イ 2行(60字)以内で書く。

2 資料と教科書の内容とを照らし合わせる。

資料(1)の時代の寺院の造営方法に関する教科書のページと内容は、

教科書の



(2) 資料(2)の内容は、そのまま利用する。

3 与えられた資料と教科書の記述から抜き出して作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。上記の「関連する教科書のページと内容」からの抜粋も記されています。

東大チャート「平安末期と鎌倉初期の寺院造立の理念の違い」(2012年度第2問設問A)

()へは、ほぼ抜き出して入れる。)へは、考えて「決めぜりふ」を入れる。

(1) 院政期の天皇家は精力的に造寺・造仏を行った。白河天皇による法勝寺をはじめとして、大規模な寺院が次々と建立された。

【教科書の記述】
 上皇は仏教を厚く信仰し、出家して法皇となり、六勝寺など多くの大寺院を造営し、堂塔・仏像をつくって盛大な法会をおこない、しばしば紀伊の熊野詣や高野詣を繰り返した。また、京都の郊外の白河や鳥羽に離宮を造営したが、これらの費用を調達するために成功などの売位・売官の風がさかんになり、行政機構は変質していった。
 (P88. L20～24)
 この頃には私財を出して朝廷の儀式や寺社の造営などを請け負い、その代償として官職に任じてもらう成功や、同様にして収入の多い官職に再任してもらう重任がおこなわれるようになった。(P80. L5～9)
摂政・関白は官吏の人事権を掌握していたため、中・下級の貴族たちは摂関家を頂点とする上級貴族に隷属するようになり、やがて昇進の順序や限度は、家柄や外戚関係によってほぼ決まってしまうようになった。その中で中・下級の貴族は、摂関家などに取り入ってその家の事務を扱う職員である家司となり、経済的に有利な地位となっていた国司(受領)になることを求めた。(P70. L25 ～P71. L4)

(2) 平氏の焼き討ちにより奈良の寺々は大きな打撃をこうむった。勳進上人重源は各地をまわって信仰を勧め、寄付や支援を募り、東大寺の再興を成し遂げた。

(5) 1262年、奈良西大寺の叡尊は、北条氏の招きによって鎌倉に下向し、多くの人々に授戒した。彼はまた、京都南郊の宇治橋の修造を発願し、1286年に完成させた。

(1)の時期＝院政期には、①は势力的に造寺・造仏を行ったが、その費用を調達するために②などの売位・売官の風がさかんになった。②とは、私財を出して朝廷の儀式や寺社の造営などを請け負うなどの③的な④の代償として、官職に任じてもらうことである。これは、摂政・関白といった官吏の⑤を掌握していた⑥に取り入るために、⑦が行うものであった。

(2)の時期＝鎌倉時代初期には、⑧上人が各地をまわって、⑨を問わず寄付や支援という⑩を広く求めて、寺院が造立された。これは⑪とは異なり、多くの⑪の⑫に基づくものであった。

抜き出したものをまとめる

(1)は ① という官吏の ⑤ を握っている ⑥

に対する ⑦ による ② 、つまり ③

的な ④ として造寺・造仏が行われた。

(2)では、⑧ 上人が各地をまわって ⑨ を問わず、寄付や支援

という ⑩ を広く求めた結果、多くの ⑪ の ⑫

に基づいて、寺院が造立された。



4 60字に要約する。

解いてみましょう（第2講）Bについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア 法然や親鸞の (ア) について書く。

イ アに対する (イ) の (ウ) について書く。

ウ 4行（120字）以内で書く。

2 資料と教科書の内容とを照らし合わせる。

(1) 法然の (ア) に関する教科書のページと内容は、

教科書の



(2) 叡尊ら (イ) の (ウ) に関する教科書のページと内容は、

教科書の



3 与えられた資料と教科書の記述から抜き出して作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。上記の「関連する教科書のページと内容」からの抜粋も記されています。

東大チャート「法然・親鸞の教えの特徴と旧仏教側の対応」（2012年度第2問設問B）

（へは、ほぼ抜き出して入れる。へは、考えて「決めぜりふ」を入れる。）

※ には、設問Aと同じ語句が入ります。

ア 法然や親鸞の (ア) **教えの特徴** は

(3) 鎌倉幕府の御家人熊谷直実は、法然が「罪の軽重は関係ない。念仏さえ唱えれば往生できるのだ」と説くのを聞き、「手足を切り、命をも捨てなければ救われないと思っておりましたのに、念仏を唱えるだけで往生できるとはありがたい」と感激して帰依した。

【教科書の記述】
天台の教学を学んだ法然は、源平争乱の頃、もっぱら阿弥陀仏の誓いを信じ、念仏（南無阿弥陀仏）をととなえれば、死後は平等に極楽浄土に往生できるという専修念仏の教えを説いて（略）
一方で旧仏教側からの非難が高まり、法然は土佐に流され、弟子たちも迫害を受けることになった。
(P113. L19 ~L24)

イ (イ) **旧仏教側** の (ウ) **活動の展開** は

(4) 1205年、興福寺は法然の教えを禁じるように求める上奏文を朝廷に提出した。このような攻撃の影響で、1207年に法然は土佐国に流され、弟子の親鸞も越後国に流された。

【教科書の記述】
律宗の叡尊（思円）と忍性（良観）らは、戒律を重んじるとともに、貧しい人びとや病人の救済・治療などの社会事業にも力を尽くし、鎌倉幕府に受け入れられ、多くの人びとに影響を与えた。(P115. L20 ~L25)

(5) 1262年、奈良西大寺の叡尊は、北条氏の招きによって鎌倉に下向し、多くの人々に授戒した。彼はまた、京都南郊の宇治橋の修造を発願し、1286年に完成させた。

法然・親鸞は、「手足を切り、命も捨てる」ような ① ことは必要なく、阿弥陀 ② 仏の誓いを信じる = ③ を唱えるだけで、誰もが ④ に極楽浄土に往生できる = ⑤ と説いた。

旧仏教側は、 ⑥ に法然たちの布教を ⑦ 禁じるように = ⑧ するように求めた。

旧仏教側は、 ⑨ を重んじるとともに、 ⑩ にも力を尽くし、宇治橋の修造を発願するなど、人々にも広く ⑪ を行い、 ⑫ に受け入れられて、多くの人々に ⑬ 。

抜き出したものをまとめる

法然・親鸞は、① なことは必要なく、② をもって
③ を唱えれば、誰もが⑤ に⑤
と説いた。

それに対して、旧仏教側は、⑥ に法然たちを⑦ するように
求める一方で、⑨ を重んじるとともに、⑩ にも尽力して
人々にも広く⑧ を行い、⑪ に受け入れられて、多くの人々
に⑫ 。



4 120字に要約する。

まとめ

鎌倉時代の仏教は、法然や親鸞など、いわゆる「鎌倉新仏教」とよばれる宗派の登場が注目される傾向にある。しかし、平安時代末期から鎌倉時代の仏教界の変化の歴史的意義は、新仏教が登場したことではなく、